日本非核宣言自治体協議会
設立３０周年記念大会報告書

～連帯する自治体　被爆地でない都市の役割と可能性～

２０１４(平成２６)年６月２日（月）　開催地：神奈川県藤沢市

日本非核宣言自治体協議会

報告書の発刊にあたって

日本非核宣言自治体協議会は、2013（平成 25）年 8 月 5 日に設立 30 周年を迎えました。この節目を捉えて、非核協が目指す核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて、これまで以上に連帯して取り組むために、2014（平成 26）年 6 月 2 日に神奈川県藤沢市において、定期総会とともに、設立 30 周年記念大会を開催しました。

記念大会では、「連帯する自治体 ～被爆地でない都市の役割と可能性～」をテーマに、被爆地でない自治体との協力関係の重要性について考えました。

また、「日本と国際社会の平和と安定に向けた取組み」と題したトークセッションでは、田上長崎市長の進行で、岸田外務大臣、松井広島市長、鈴木藤沢市長が意見交換し、岸田大臣は、「核兵器の問題はオールジャパンで取り組むべき問題」として、自治体の役割の重要性を述べられ、協力して取り込むよう呼びかけました。

今回の大会は、多くの自治体や市民の皆様にご参加いただき、それぞれが自らの役割を再確認し、核兵器廃絶に向けて連帯するための実りの多い大会となりました。これもひとえに、藤沢市の皆様やご出演いただいた皆様、さまざまな形で大会の開催にご尽力いただいた関係者の皆様のおかげです。心から感謝申し上げます。

大会については、新聞等でも報道され、非核協について多くの市民の皆様に知っていただく機会ともなりました。

非核協は、今後ともより多くの自治体に連帯の輪を広げ、住民が核兵器の脅威を感じることなく安心して暮らしていける地域社会の実現に向けて、粘り強い活動を続けていきます。

目　　次

設立 30 周年記念大会

プログラム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

オープニングアトラクション　席上揮毫・・・・・・・・・・・・・・・ 2

歓迎挨拶　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

特別感謝状贈呈・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

設立 30 周年記念樹木目録贈呈　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6

平和学習発表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7

トークセッション「日本と国際社会の平和と安定に向けた取組み」・・ 9

オープニングアトラクション　記念演奏・・・・・・・・・・・・・・・20

記念講演　「ピース・フロム・藤沢」・・・・・・・・・・・・・・・・・21

記念合唱・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

全国首長リレートーク　「2 分 1 本勝負」・・・・・・・・・・・・・・・23

エンディング・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・26

関連企画

「核兵器なき世界への連帯－勇気と希望の選択」展・・・・・・・・・・27

設立 30 周年記念レセプション・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28

参加状況・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29

新聞報道・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30

プログラム

日時：2014（平成 26）年 6 月 2 日（月）　14：00～17：15
開催地：神奈川県藤沢市
会場：藤沢市民会館　小ホール
主催：日本非核宣言自治体協議会

【第 1 部】

オープニングアトラクション　席上揮毫　（書家 金澤 翔子 氏）
歓迎挨拶　（神奈川県知事 黒岩 祐治 氏）
特別感謝状贈呈　（前宮城県美里町長 佐々木 功悦 氏）
設立30周年記念樹木目録贈呈　（藤沢市議会議長 高橋 八一 氏）
平和学習発表　（藤沢市立善行中学校）

トークセッション「日本と国際社会の平和と安定に向けた取組み」
岸田 文雄 外務大臣
松井 一實 広島市長（平和首長会議会長）
鈴木 恒夫 藤沢市長（日本非核宣言自治体協議会副会長）
進行　田上 富久 長崎市長（日本非核宣言自治体協議会会長）

【第 2 部】

オープニングアトラクション　記念演奏
「生きて ～Vivir」 「輝きの時 ～La Alegria」 （長崎平和特派員 ドゥ・マルシェ）
記念講演 「ピース・フロム・藤沢」　（映画作家 大林 宣彦 氏）
記念合唱 「藤沢市歌」 「千羽鶴（長崎被爆 50 周年記念歌）」
（私立湘南白百合学園中学・高等学校コーラス部）
全国首長リレートーク 「2 分 1 本勝負」
邑上 守正 東京都武蔵野市長
平井 竜一 神奈川県逗子市長
淺利 敬一郎 大阪府豊中市長
竹内 脩 大阪府枚方市長

エンディング 「手のひらを太陽に」合唱

第１部オープニングアトラクション　席上揮毫

書家　金澤　翔子　氏

【プロフィール】

５歳から書道を始め、建長寺、建仁寺などで個展を開催するとともに、2012 年の NHK 大河ドラマ「平清盛」の題字を揮毫、また、東日本大震災の被災地における揮毫など、「ダウン症の天才書家」として、様々な分野でご活躍されている。

翔子さんは、何よりも戦争や争いごとが嫌いで、そうした世界に心を痛めるとともに、皆がお互いの違いを認め、尊重し合って生きることの素晴らしさを自らの書を通じて表現されている。

2015 年３月には、国連が定める国際デー「世界ダウン症の日」に、ニューヨークの国連本部でのスピーチが予定されている。

歓迎挨拶

神奈川県知事 黒岩 祐治 氏

ご紹介いただきました神奈川県知事の黒岩祐治です。

本日は全国から多数の皆様のご参加のもと、ここ神奈川県藤沢市で日本非核宣言自治体協議会設立 30 周年記念大会を開催できることを、地元自治体として、大変うれしく思います。今年は「連帯する自治体～被爆地でない都市の役割と可能性～」をテーマに、首都圏で初めて開催されることになりました。ここ藤沢市は、本協議会の設立初期に会長職を担うとともに、現在まで副会長を務めていまして、神奈川県は、都道府県で唯一の加盟団体となっております。

本協議会の設立の趣旨は、「核戦争による人類絶滅の危機から、国民の生命とくらしを守るため、世界恒久平和の実現に寄与することが、自治体に課せられた重大な使命であり、核兵器廃絶を世界に呼びかけ、その輪を広げるため努力する」というものです。現在、会員数は約 300 団体に拡大しまして、国際会議への出席、NGO との連携、核実験に対する抗議など活動の輪を広げています。

昨年 10 月、日本を含む 125 カ国が、核兵器の非人道性とその不使用を訴える声明を、国連総会第 1 委員会において発表しました。声明では、「いかなる状況においても、核兵器が二度と使用されないことが人類の生存そのものにとって利益」と明記されました。また、来年 2015 年には、戦後 70 年、被爆 70 年を迎えます。同年には、NPT 運用検討会議を控えており、「核のない世界」に向け、国際的な動きも活発化しております。こうした動きが、国際的な核軍縮の機運をさらに盛り上げていくことを期待しています。

ところで、非核といいますと、私がいつも思い出すのは、1997 年から 2 年間、ワシントン D.C.に住んでおりましたときの体験です。当時、航空宇宙博物館でエノラ・ゲイの展示会が行われました。そこに足を運んだときの衝撃、今も忘れることができません。あの核爆弾を落とした飛行機が、ピカピカに磨き上げられ、平和をもたらした英雄という形で展示されていました。映像も流されていましたが、あのモクモクと上がるきのこ雲、すべて空の上から見ただけの映像でした。そして、アメリカ兵をはじめ、たくさんの命をエノラ・ゲイが救ったのだ、平和をもたらした英雄なのだという表示がありました。そこには、我々日本人が知っているこの核の恐ろしさ、地上ではどういうことが起きていたのかという血の臭いは全くありませんでした。同盟国であるアメリカとも歴史認識がこれほど違うということを痛切に感じました。しかし、歴史認識が違えども、最高の二国間関係は作れるということも改めて思いました。そういう中でこそ、あの地上で起きたことの悲惨さ、それを我々は被爆国として、後世にまで、しっかりと伝えていかなければならない。そのことを強く、強く、感じた次第でした。

そういった思いを各自治体と共有できるこの大会が、すばらしい会になりますよう心からお祈り申し上げます。本日は、ありがとうございました。

特別感謝状贈呈

前宮城県美里町長 佐々木 功悦 氏

【佐々木 功悦 氏（宮城県美里町）】

2014 年２月まで美里町長（非核協幹事）を務められた同氏は、宮城、福島両県の非核宣言未実施自治体を訪問するなどして宣言を呼び掛け、結果、宮城県内の全ての自治体が宣言を実施するに至った。併せて、同氏の働き掛けにより現在までに 12 自治体が非核協に加盟するなど、特に非核協の発展に貢献された。

設立 30 周年を記念し、核兵器廃絶や恒久平和の実現のための活動にご尽力いただいた個人、団体に対し感謝状を贈呈することで、その貢献への感謝の意を表し、会員自治体における平和行政のさらなる活性化を図ることとしました。

会員自治体から 6 件（個人 2 件、団体 4 件）の推薦があり、特に、自治体間の協力体制の確立に尽力するなど本協議会発展への貢献度が高いと認められた佐々木 功悦氏には、審査委員会（役員会が兼務）による承認を経て、田上 富久会長から特別感謝状と記念品が贈呈されました。

また、廣中正樹（広島県福山市）、北本市平和を考える実行委員会（埼玉県北本市）、町田市原爆被害者の会 町友会（東京都町田市）、東広島市原爆被爆資料保存推進協議会（広島県東広島市）、おはなしを楽しむ会（富山県魚津市）は、いずれも平和・原爆関連の行事に携わり、被爆体験を語り継ぐなど、非核協の目的と一致する活動を継続的に実施するとともに、各自治体における平和行政のさらなる活性化が期待できるため、後日、推薦自治体を通して、感謝状を贈呈しました。

特別感謝状贈呈後の佐々木様のご挨拶

皆様、こんにちは。宮城県美里町の佐々木 功悦と申します。ただいま、非核協 30 周年という記念すべき大会におきまして、ご紹介と同時に、特別感謝状を贈呈いただきましたことを、田上会長をはじめ、関係する自治体の皆様に心から感謝申し上げます。

私は、平成 5 年より本年の 2 月まで、約 20 年間余り、非核協の東北ブロック担当の役員として、平和行政の推進は当然でありますが、核兵器廃絶と世界の恒久平和を願って活動してまいりました。この間、多くの皆様のご指導をいただきましたことに、改めて感謝申し上げます。

本日は、非核協がまさに 30 周年という節目となりました。ここに集う関係する自治体の皆様のこれまでのたゆまざるご支援とご協力があってのこの 30 年だと思います。改めて、心からの敬意と感謝を申し上げます。

私から言うまでもなく、日本は唯一の被爆国であります。ゆえに、核兵器廃絶を願って、世界に発信する責務が、私たちにはあると思います。しかし、残念ながら、国内には、私たちの願いをまだ理解できず、非核都市宣言を実施していない自治体があることも事実です。どうぞ、本日お集まりの多くの自治体の皆様が参加して、全国の自治体の協力のもとに、世界の核兵器廃絶と恒久平和を願って、活動していただきますように心から祈念し、お願い申し上げたいと思います。

今日は、このようなすばらしい式典で感謝状を贈呈していただきましたことに、改めて感謝を申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。誠にありがとうございました。

設立 30 周年記念樹木目録贈呈

藤沢市議会議長　高橋　八一　氏

松井　一實　広島市長（非核協副会長）から、高橋　八一藤沢市議会議長へ設立 30 周年記念樹木の被爆アオギリ二世の目録が贈呈されました。

本協議会では、原爆が投下された当時、強烈な熱線と爆風の中で生き残った旧広島逓信局のアオギリと長崎の山王神社のクスノキの種から育てられた苗木を 2002（平成 14）年から会員自治体に配布しています。

日本各地に植えられた苗木はすくすく育ち、平和の尊さを伝えるとともに、過ちを再び繰り返さないよう、被爆の実相を後世に伝えています。

設立30周年記念大会の会場である藤沢市民会館の敷地内にも、2010（平成 22）年に、藤沢市制施行 70 周年を記念し、被爆クスノキ二世が植樹され、今も青々とした葉を茂らせています。

今回贈呈した被爆アオギリ二世は、藤沢市の新庁舎整備後に植樹される予定です。

平和学習発表

藤沢市立善行中学校

平和都市宣言を読み上げる鈴木藤沢市長

【藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言】

わが国は世界で唯一の核被爆国であり，核兵器廃絶と恒久平和の実現は全国民共通の願いである。

しかし，すでに地球上には多くの核兵器が貯えられ，人類の生存に深刻な脅威を与えている。

藤沢市は，日本国憲法の精神に基づく国の平和と安全こそが，地方自治の根本的条件であることにかんがみ，非核三原則が完全に実施されることを願い，核兵器の廃絶と軍縮を全世界に訴え，この人類共通の大義に向かつて不断の努力を続ける核兵器廃絶の平和都市であることを宣言する。

【藤沢市長の発言】

今、私が読み上げた宣言は、約 30 年前、1982 年 6 月に、多くの市民の署名を受け、制定されました。

当時の資料を見ますと、「平和な地球　その未来のために」「地域から平和の輪をひろげよう」といった表現が多く見られます。

そして、当時、宣言に込められた思いは、次世代を担い、今を生きる子どもたちにも、しっかりと受け継がれております。

今日は、そんな子どもたちを代表して、善行中学の皆さんに、平和学習発表をしてもらいます。

それでは、よろしくお願いいたします。

市長と握手してバトンを受け取りました

【藤沢市立善行中学校の発表】

藤沢市立善行中学校の 3 年生は、2 年生から、平和学習に取り組んできました。国語の授業で、『ヒロシマ　壁に残された伝言』を学んだり、絵本『広島の原爆』の読み聞かせを学年集会でしたり、「平和を求めて」というテーマで、パネルディスカッションを行ったりしています。

また、2 年生の秋には、広島で被爆し、12 歳で亡くなった佐々木禎子さんの甥御さんに当たるシンガーソングライターの佐々木祐滋さんの講演を聞きました。

禎子さんの折鶴に込められた思いをつづった歌は、僕たちの心にしみ入りました。

今、善行中学校の中庭では、被爆アオギリ二世が若葉を茂らせています。このアオギリは、去年（2013 年）、広島市の松井市長さんからいただきました。卒業した当時の 3 年生は、広島に行き、平和記念公園で語り部さんの話を聞き、資料館で多くの展示物を見てきました。そして、ヒロシマの思いを受けとめ、平和への思いを伝えようと、「平和祈念詩集」をつくりました。今日は、その「平和祈念詩集」の中から、詩を２編朗読し、善行中学校の平和への思いを、皆さんに伝えたいと思います。

金子紗奈さんの詩には、平和記念公園のきれいな緑と、この公園を訪れた人々の思いが書かれています。詩の中の、「人々からの贈り物」という言葉は、平和記念公園の樹木が、被爆後に、多くの県から贈られたものであることをあらわしています。また、詩の最後の表現からも、戦争のことを次の世代に伝えようという金子さんの思いが込められています。

作者の中塚将司さんは、修学旅行で広島に行き、実際に、自分の目で原爆ドームを見ました。そこで、何で原爆をつくったのだろうと思ったことが、『なんで』という詩をつくるきっかけになりました。この詩の終わり方は、「みんなで平和を目指そうよ　目指せるって」です。中塚さんは、心から平和を願っているのだと、最後の部分を読んで感じました。また、この詩を読んでいる僕たちにも「なんで」と強く訴えかけているように感じます。

僕たち 3 年生 145 名は、一人ひとりの平和への思いをこの鶴に託しながら折りました。5 月 30 日、完成した作品がこちらです。約 1 万羽の折鶴で、平和の象徴であるハトが、一輪の花を世界に届ける様子をイメージしています。この鶴を、6 月 19 日、広島に行き、平和記念公園の「原爆の子の像」に、平和の思いとともに捧げたいと思います。

『あしあと』　金子 紗奈 作

緑が揺れる公園に
今も残る原爆の痕跡

月日は長かったのか
短かったのか

その一つ一つに
人々の思いが込められていて

人それぞれに
感じることは違うけれど

ここは
私たちが
伝えていかなければならない
場所なのだと
教えられた気がした

緑はきっと知っている
あの日からの月日も
人々の思いも

不似合いなほどの
綺麗な緑は
人々からの
贈り物

今日も世界中の
たくさんの人々が
平和を願い
訪れ

あの日から
広島とともに
生きてきた
大切な命

残していく
自分のあしあとを

『なんで』　中塚 将司作

ヒトはいずれ死ぬ
でもそのとき
一瞬にして死んでいった
なんで

ヒトは死んだら焼かれる
一人ずつ丁寧に
でもそのとき
一緒くたに焼かれた
それも雑に
なんで

焼かれたヒトは一人ずつ骨壺に入れられる
でもそのとき
周辺一帯となって箱に入れられた
なんで

原爆はヒトをヒトとさせてくれない
危険だ
なんで原爆があるんだ

なくせよ　早く捨てろよ
そうしないと平和なんていつになるんだよ

みんなで平和を目指そうよ
目指せるって

トークセッション「日本と国際社会の平和と安定に向けた取組み」

岸田　文雄　外務大臣

世界の動向、自治体に期待する役割や可能性について

松井　一實　広島市長（平和首長会議会長）

平和首長会議の取組みや非核協との連携について

鈴木　恒夫　藤沢市長（日本非核宣言自治体協議会副会長）

藤沢市の取組み～被爆地でない都市の役割と可能性について

進行　田上　富久　長崎市長（日本非核宣言自治体協議会会長）

非核協 30 周年の歩みと今後の取組みについて

田上　長崎市長

【非核協 30 年のあゆみについて】

ただいまご紹介いただきました日本非核宣言自治体協議会の会長を務めております長崎市長の田上と申します。

本題に入る前に、「非核協（日本非核宣言自治体協議会）って何だろう」と思っている方がたくさんいらっしゃると思いますので、まずは非核協とは何かについてお話しします。

今から 30 数年前の 1980 年、イギリスのマンチェスター市が、「私たちのまちは非核のまちです」という宣言をしました。そして、世界中の都市に「みんなで非核宣言をしましょう」と呼びかけました。その波は世界中に広がっていき、日本でもたくさんの非核宣言自治体が誕生しました。そして、その 4 年後の 1984 年、ちょうど 30 年前に、非核協の前身である日本の非核都市宣言自治体の連絡協議会ができました。広島県府中町でその会が生まれ、府中町長がそのときの会長に就任されました。それから 2 年後、新しい会長を選びました。その新しい会長が藤沢市長さんで、その後 10 数年間、会長を務めていただきました。さらに、その後、日本非核宣言自治体協議会という名前になりました。

ですから、府中町で生まれ、藤沢市で育ったというのが、この非核協の歴史でもあります。そのまちに帰ってきて、ここで 30 周年を祝い、記念の大会が開催できることを大変うれしく思います。

ということで、現在の藤沢市長を務めていらっしゃる鈴木市長、長崎と一緒になって平和の活動をしている広島市の松井市長、そして、何よりも、今日は岸田外務大臣が、本当にお忙しい国会の最中に、藤沢に駆けつけてくださいました。本当にありがとうございます。

ご存じのように、岸田外務大臣は広島のご出身です。ですから、核兵器の問題については、本当に熱心に取り組んでくださっており、若い人たちに継承していくための「ユース非核特使」という仕組みをつくられたり、昨年 9 月には、大臣ご自身が、広島と長崎の訪問を国連で呼びかけてくださったり、それから、今年は、各国の首脳が集まって、核兵器について話し合う NPDI（軍縮・不拡散イニシアティブ）外相会合の場を、広島市で開催してくださったことで、皆さんが広島の現場を見て、話し合いをすることができる仕掛けをしてくださったり、いろいろなことをしてくださっている大臣です。そういう意味でも、今日は、国であったり、あるいは、被爆地であったり、それから、被爆地ではない自治体であったり、それぞれいろいろな立場からのお話ができればと思っています。

まず、大臣に伺いたいのですが、それぞれ立場が少しずつ違うところもありますので、国として、核兵器の廃絶に向けて取り組んでこられたことや、その根っこにある考え方などについてお話しいただければと思います。

岸田　外務大臣

【核兵器廃絶に向けての世界の動向、日本政府の取組みについて】

皆さん、こんにちは。ご紹介に預かりました外務大臣の岸田 文雄と申します。

まず、今日は日本非核宣言自治体協議会の総会と 30 周年記念大会ということで、こうした大会を受け入れてくださった鈴木藤沢市長さんをはじめ関係者の皆様方に心から感謝を申し上げます。また、その貴重な大会において、私もこうして話をさせていただく機会をいただきましたことに心から感謝を申し上げます。

先ほど田上市長さんから、国の取り組みについて話をと促していただきました。まず、この世界の現実ですが、冷戦が終わった後、核兵器の数は少なくなってはおりますが、残念ながらまだ道半ば、不十分であると言わざるを得ません。核兵器は、最も多かったとき、世界中で 7 万発が存在したと言われています。今、世界には 1 万 7 千個の核兵器が存在すると言われています。“まだ”1 万 7 千個あると言わざるを得ないのではないかと思っています。核の不拡散についても、北朝鮮やイランの動きを見ますと、ますます深刻になっているというのが現実ではないかと思います。その中で、我が国としては、現実的かつ実践的に「核兵器のない世界」という大きな目標に向けて前進をしていかなければなりません。そのために、核兵器の数を減らす、核兵器の役割を減らす、あるいは核兵器を保有する動機を減らすといった取り組みを進める必要があります。さらには、核兵器の被害に対する正確な認識と、核兵器をめぐる安全保障環境に関する冷静な認識を併せ持ちながら、現実的かつ実践的な取組を進めています。この内容については、今年 1 月、田上市長さんの地元の長崎大学で講演させていただいた際にもご説明をさせていただいております。

こうした取り組みについて、我が国としましては、唯一の戦争被爆国として議論をリードするべく NPDI と呼ばれている核兵器を持たない 12 か国でつくる枠組を中心に、国際的な動きを主導しています。この枠組は、2010 年、日本とオーストラリアが中心になって立ち上げた枠組で、今年 4 月に 8 回目となる NPDI 外相会合が、初めて日本で、そして、被爆地広島で開催されました。12 か国を代表する外務大臣等の方々に、原爆資料館の見学や被爆者証言を聴講いただく等、被爆の実相に直接触れていただき、その上で議論をしていただきました。各国からは、「忘れられない思い出である」といった発言が相次ぎ、世界のリーダーが被爆の実相に直接触れていただくことは大変意義がある、ということを重く感じた次第です。この NPDI 外相会合においては、「広島宣言」を発出し、国際社会に大きな提言をさせていただきました。

また、今、国際社会の中で、核兵器の非人道性という議論があります。世界中には、核兵器を持っている国、持っていない国、あるいは、安全保障において深刻な脅威に直面している国、そうでない国、いろいろな国があります。核兵器の非人道性という認識がいろいろな立場の国々を結束させる触媒として、しっかりと活用していかなければならないと考えており、核兵器の非人道性という認識を世代と国境を越えて広げていく、科学的な側面から深めていくといった提案を広島宣言の中に盛り込みました。

来年は被爆 70 年という大きな節目の年であり、併せて、5 年に 1 度開催される核兵器不拡散条約（NPT）再検討会議という、核軍縮・不拡散にとって大変重要な国際会議が予定されています。この会議に、こういった我が国の取り組み、あるいは考え方をしっかりと反映をさせていこうと思っています。

田上　長崎市長

ありがとうございました。今、いろいろな考え方、取り組みについてのお話がありましたが、非人道性については、長崎や広島ではずっと昔から問い続けられてきたテーマで、それがなぜ今、取り上げられるのだろうという意見が長崎でも広島でもありました。

実際には、これまでのやり方ではなかなか

なくならないという問題意識の中から、「非人道性という視点から、もう一度核兵器を見てみよう」といった動きが出てきました。そのような中、昨年の秋には、核兵器をいかなる状況でも使用すべきではないとする共同声明に日本が賛同しました。

広島は、長崎とともに、平和推進に取り組まれていますが、これまでの取り組みの考え方、何か一つ柱になるようなことを松井市長からお話しいただければと思います。

松井　広島市長

【「2020 ビジョン」の早期実現に向けた平和首長会議の取組みについて】

ありがとうございます。広島市長の松井 一實でございます。今、田上市長からお話がありましたが、「2020 ビジョン」という核兵器廃絶を着実に進めるための行動計画についてご説明させていただきます。

設立 30 周年の記念大会に、こんなに多くの方に集まっていただき、田上市長さん、藤沢市の皆様のご協力のもとに盛大に開かれているということで、しっかりとしたメッセージを皆さんにお伝えしたいという気持ちでおります。

この「2020 ビジョン」の行動計画をつくった主体は、平和首長会議というもので、今ここにつけているバッジのように、ハトのマークで象徴しております。この平和首長会議は、英語では「Mayors for Peace」という名称で通っていて、現在、世界で 6,084 都市が加盟しています。国の数は 158 カ国あります。そして、加盟都市の人口を足し合わせていくと約 10 億人になり、地球全体が 70 億人ですから、7 分の 1 の方に入っていただいていると見ていただいていいと思います。国内では 1,454 都市が加盟していて、日本の市町は全体で 1,742 ですから、83.5%、ほとんどの都市がこのメンバーに入っていただいている、そんな存在です。この会議が主体で行動計画をつくり、昨年 8 月に開催した総会で決定しました。その取り組みは 3 つの柱からなっております。

まず 1 つ目は、平和首長会議が、人の安全保障をしっかりとしていくために、もっと多くの共感を得られるように、加盟都市を拡大し、会議の運営体制を充実していくことです。それとともに、世界各国、いろいろと状況が違いますので、地域ごとに、リーダーとなる都市を定め、その地域の特性に合った行動をしていくことで、独自の行動をしながら、全体として平和に向けて行動していこうと考えています。

2 つ目は、核兵器廃絶の国際世論をもっと広めていこう、拡大していこうということです。そうすると、理屈や方法論で皆さんを説得することに走りがちなのですが、そのベースの気持ち、何でそういうことを考えるのだろうということを一人ひとり考えていただくということをやって、世論拡大を目指します。そのために、被爆の実相を伝えるための原爆ポスター展を皆さんに直接見ていただく。さらには、被爆樹木の種や苗木を、そのまちで、水をやりながら育てていただいて、日々、平和の思いを新たにしていただく。あるいは、広島の平和記念公園にある「平和の灯」を分火し、それをずっと、核兵器がなくなるまでともし続けていただく。そんなことをやりたいと思っています。実際、こういった運動は赤十字国際委員会や NGO の方々の賛同も得て、相当大きな広がりを見せています。これをもっともっと広げていきたいというのが 2 つ目であります。

3 つ目は、核兵器を禁止するための取り決め、つまり、条約の実現を目指そうということであります。このアイデアはあるのですが、なかなか具体的な動きは進んでおりませんので、核兵器禁止条約の早期実現に向けて、国と国の交渉をやっていただきたいと思っているわけです。そのために、いろいろな皆さんの賛同を得て、署名活動を行っています。今年 4 月、NPT 再検討会議第 3 回準備委員会に、人を送って、国連の各国首脳、あるいは国連の事務総長さん方にも署名をお渡しして、要請活動いたしました。先ほど、大臣の話にありましたが、今の NPT 体制の中で、1 万 7,000 発もの核兵器がなかなか

減っていかない。これをもう少し市民、国民、世界の人々が見て、確かに減ってきたな、平和に一歩でも二歩でも向かっているなと実感していただけるような取り組みをしっかりやっていきたいと思っております。

そして、今年の 4 月には、大臣のご配慮で、NPDI 外相会合を広島で開催し、広島宣言を出していただきました。ここでのポイントは、核兵器をなくそうじゃないかという問題意識が多くの方にあるはずなのですが、実際の世界の状況を見ますと、なかなか進んでいない。それを早く進めるために、原点に立ち返って、何が要るのだろうかと考えますと、やはり各国の為政者の方々が、核兵器を使うことの、人の道にあらざる状況を心に刻んでいただく、そして、そこからいろいろな政策を考えていただきたいと思っております。先ほど、黒岩知事から話がありましたが、キノコ雲の上から見る絵は心に響きません。実際にキノコ雲の下で何が起こったのか、雲の下で起こっている人の道に劣るようなこと、これを起こさないために何をするかということを、為政者の方々に自ら考えていただくということを進めたいと思っています。

この思いを、先ほど、中学生の方が言われましたが、次の世代にも伝える、そして、多くの方々に伝えたい。核兵器は「絶対悪」であるということを心に刻んで、そのためのご尽力を多くの方にお願いをしていくというのは、広島の願いでありますし、田上市長さんがおられる長崎市の願いと思っています。どうかよろしくお願いいたします。

田上　長崎市長

ありがとうございました。広島と長崎はコンビで活動することが結構多いのですが、時々、冗談で、広島と長崎は、「広く伝える」と「長く伝える」のコンビかなと言ったりするのですが、実際、世代を超えて長く伝える、広く伝えるということで言うと、広島と長崎だけでは伝わりにくいことがやはりあります。広島と長崎だけが平和の話をすると、2 つのまちで起きた過去の出来事だと捉えられがちですが、実際には、核兵器の問題は今と未来の問題であり、しかも、2 つのまちの問題ではなく、世界共通の問題だということが伝わりにくくなってしまいます。広島、長崎だけではやっぱり力が弱い。そういう意味で、平和首長会議なども含めて、いろいろなネットワークが大事だと思うのですが、被爆地でない都市でいろいろな活動をしてきたまち、活発な活動をしてきたまちの 1 つが藤沢市だと思います。藤沢市の鈴木市長からも、これまでの取り組みのご紹介をお願いします。

鈴木　藤沢市長

【藤沢市の平和への取り組み】

被爆地でない都市、藤沢の市長の鈴木恒夫でございます。

今までの皆様のお話を伺い、藤沢で 30 周年記念大会を開催するということの意味が、まさにこうした点にあると改めて認識させていただいた次第です。

先ほど、田上市長から、イギリスのマンチェスター市が非核宣言を行い、そして、その波が世界中に広がったというお話がございました。藤沢市でも、かなり早い時期にこういった意識が盛り上がっていたことを記憶しております。当時、私は市議会議員を務めておりましたので、この宣言が制定されていく過程を知っておりますが、本当にいろいろな意見がございました。しかし、そうした様々な意見の違いを乗り越え、先ほど私が読み上げたような文面にまとまり、市民の思いも一致していったことを大変素晴らしいことだと感じております。社会的な状況や議論の盛り上がりの中で、都市としてなすべきことや市民の思いが、この宣言にしっかりと盛り込まれたということ、これが宣言をつくった大きな意義ではないかと思います。

また、ただつくるだけではなく、これをいかに実践し、継続してつなげていくかということが、とても大事なことではないかと思っております。

市では、平和に関する講演会や被爆の写真展、

次世代を担う児童・生徒の被爆地への派遣などが行われておりますが、何よりも、市民と行政が一体となって取り組んでいるということがとても大きいと思います。実は、宣言をしてから、私を含めて、市長は 3 人かわっているのですが、その間も、この宣言の趣旨に共感し、普遍的なものとして、市民の皆さんと一緒に取り組んできたことは、実はすごいことではないかと感じております。

先ほど、善行中学校の皆さんに大変心に残る平和学習発表をしていただきましたが、これからはやはり、“次世代への継承”が、一番大切なテーマになっていくと思います。藤沢では、被爆地である広島・長崎へ、これまで約 30 年間にわたり、児童・生徒を 1,000 人以上派遣しております。これからもしっかりと継続して進めようと思っておりますが、行って終わりというのではなく、行った子どもたちに芽生えた平和への意識をフォローしていく仕組みづくりにも力を入れております。

私も、広島・長崎へ行き、式典参列後に、現地で子どもたちと会う機会があるのですが、最初は何となく興味本位で参加した子どもたちも、式典が終わり、被爆地跡の見学や語り部の方の貴重なお話などを通じ、真剣になってくるのがわかります。そして、派遣終了後には、藤沢でその報告会が行われるのですが、その時は、皆すごく成長していて、毎年本当に感心させられます。記憶から薄れて、忘れてしまうということもあるのでしょうが、公募で選ばれた市民の方で構成される「藤沢市平和の輪を広げる実行委員会」の皆さんが、様々な機会を捉え、地域での活動を通じ、広島・長崎派遣者のフォローをしてくださっていることも忘れてはなりません。

宣言の趣旨の普及を安定的・継続的に進めるため、「藤沢市平和基金」の創設や「藤沢市核兵器廃絶平和推進の基本に関する条例」があるという点にも言及をさせていただきます。

これが、被爆地でない自治体としての主な取組みの紹介となります。

田上　長崎市長

ありがとうございました。非核協の会員は、広島、長崎以外がほとんどで、そういう自治体の皆さんには、今、鈴木市長からお話しいただいたことはすごく参考になるのではないかと思います。実際に、市民の皆さんの活動もいろいろな種類の活動があって、そこにまた行政も参画して、あるいはバックアップしながら活動をしていくという上で、今後、被爆地でない都市ができることというテーマで、皆さんにお話しできる基本的な考え方があったら、アドバイスをいただければと思います。

鈴木　藤沢市長

【被爆地でない都市としてできること】

被爆地でない都市ができること、という点でございますが、まずは、様々な取組みを行う中で、被爆地の皆さんに思いを寄せることができればと思っております。

例えば、今日、皆さんにお配りした記念品は、地元出身の方による湘南江の島のイラストが描かれたポストカード、メモ帳、ボールペンとなっていますが、よくご覧いただくと、紙の中に、やさしい感じで、赤、青、黄などの色が少し混じっていることがおわかりになるかと思います。これは、実は平和への願いを込めて全国から被爆地等に捧げられた折り鶴を再利用してできているからなのですね。私自身も、当記念大会を多くの方に知っていただきたくて、折り鶴再生紙の名刺を作成し、使ってみたのですが、相手の方にお渡しする際、何かすごく思いが伝わってきて、また、それがきっと相手の方にも伝わっているのではないかと思うと、とてもあたたかな気持ちになりました。実は、私も当記念大会を通じ、こうした取組みを知ったわけですが、大変勉強になった次第です。

また、自分たちの住む地域から、平和を考えていくことも大切だと認識しております。今日も、先に行われました、非核協の役員会で、大阪府八尾市さんから『戦争の記憶』という大変

貴重な本をいただき、改めて感じたことでもあるのですが、被爆地でなくても、身近な戦争体験、あるいは、戦争による戦禍というものは各自治体・地域に残っているわけです。やはり、平和への取組みを着実に続けていくために、そうしたことを子どもたちに伝えていく、あるいは、各自治体・地域で行っている取組みについて、情報交換をしながら、お互いに高めていくことができたらと思っております。

手前味噌になってしまい、大変恐縮ですが、藤沢市歌の中にも「平和なり　われらが街（ちまた）」という歌詞がございますし、都市像の中にも、「郷土愛あふれる藤沢　松風に人の和うるわし湘南の元気都市」と、人の和（輪）というものの大切さや素晴らしさが織り込まれております。最近では、2020 年に東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることが決定し、大いに盛り上がっておりまして、市でも誘致・支援委員会というものを組織しております。そうした際にも、平和への願いを絶えずベースに置きながら、市民の皆さんと一緒に進めていけたらと思っております。

他方、非核協や平和首長会議への参画を通じ、個々の自治体ではなし得ないグローバルな視点での取組みも可能になるのではないかと感じております。「北東アジア非核兵器地帯」の実現に向けた連帯や「核兵器禁止条約」の市民署名による連帯など、被爆地でない都市にできる大きな使命と感じております。

田上　長崎市長

ありがとうございます。今のお話の中には、かなりたくさんのヒントが含まれていたと思います。非核協の仲間の皆さんの活動のヒント、考え方が含まれていたと思いますので、ぜひもう一度整理していただけるといいと思います。

私は、被爆地長崎の中でも、戦争を体験していない世代ですので、被爆の体験は共有できません。「私も体験した人の気持ちはよくわかります」というようなことは、絶対に軽々しく言えません。たしかに、体験は共有できませんが、核兵器はなくしたいという思い、核兵器のない世界を次の世代に残したいという思いは共有できると思います。そのため、被爆地ではない都市の皆さんとともに、取り組むことというのは、当たり前にできると思っています。

さて、非核協というのは、非核宣言をした都市が、宣言はしたけれど何をしたらいいのかわからないとならないよう、いろいろな活動のツールを提供する場でもあるのですが、非核協と、平和首長会議の連携などについて、松井市長にお伺いと思います。

松井　広島市長

【平和首長会議の非核協との連携】

広島市は、長崎市の田上市長とご一緒させていただいて、役割分担しながら、多くの方々にお願い事をしておりますが、基本は寸分たがわず１つであります。

つまり、今、戦争を実際に知らない世代が多くいる中で、戦争は大変なものだ、やるべきじゃないということを、自分たちがもう１回味わう必要はないと思うので、我々のご先祖が二度と戦争をすべきでないと判断し、その判断した気持ちを自分たちも理解しながら、次の世代に伝えるということをやりたいのです。人を殺し、都会を破壊する究極の兵器をなくしたいと願えば、そして、行動すれば、兵器はなくなっていくということを、人間は忘れてしまうんじゃないですか。

そして、抑止という人を脅すことで平和を保とうという方向に、つい行きがちで、その究極兵器がやはり欲しくなるという思考を消さなければいけないと思います。昨年の８月の平和首長会議で採択したヒロシマアピール、広島宣言で、そういったことを一生懸命訴えています。「現に核の緊張が高まる中東、北東アジア、南アジアなどの地域において、国際的・地域的な平和と安全保障を促進するための具体的な施策や枠組、信頼醸成のための措置を整備することが必要である」という言い方をしています。信頼醸成、そして、具

体的な枠組です。そして、昨年の平和宣言におきましても、「北東アジアにおける非核兵器地帯の創設に向けた関係国の更なる努力が不可欠です」という言い方をしました。実は、田上市長と私で、役割分担をしながら、今年の NPT 再検討会議準備委員会でも、国連事務総長などにお話しした経験があります。私は主に、核兵器禁止条約の実現に向けて、早く交渉をしていただきたいと申し上げました。田上市長からは、もう 1 つの信頼醸成の創出、つまり、北東アジアなどを中心に、核兵器を持たない地域をつくるという方法で、最終的な核兵器廃絶を目指そうということを申し上げました。現に、核兵器があるわけですから、それを広めないようにしながら、どんどん縮めていって、最終的に廃絶するため、役割分担をしながら、いろいろな取り組みをやっています。そして、要請や署名を通じて、皆さんお一人おひとりに、その気持ちをわかっていただきたい。わかっている方が世界中にこんなにたくさんいることを皆さんに伝えていきたいのです。北東アジアの非核兵器地帯化を支持する声明につきましては、いろいろな要請活動がありまして、結果として、今、95 万筆、そして、その声明に賛同した 544 自治体があります。

さらに、その気持ちを深めていただくために、原爆ポスター展で、どんなことが人類にとって起こるのか、本当に大変なことが起こるのだということを学習していただきたいと思います。

そして、私と田上市長、平和首長会議と非核協の連携を深めるために、非核協が年 2 回ほど開催している研修会に、平和首長会議の加盟都市も参加していただき、もっと勉強していただこうと考えています。また、今年度から、平和首長会議でも被爆樹木の配付事業を実施しています。広島は被爆アオギリ二世の苗木、長崎は被爆クスノキ二世の苗木です。これを皆さんに植えていただいて、水をやりながら、こんなことはあってはいけないなという気持ちを、いつも心にとめていただきたいと思うわけであります。

理念ではなくて、日々の行動の中で平和のありがたさを感じ、平和を目指そうという機運を多くの方々が持つような取り組みを、多くの都市でやっていただきたいと思っています。

田上　長崎市長

ありがとうございました。今、いろいろな市の取り組み、考え方があったのですが、基本的に、被爆国として、国であったり、それから、先ほど黒岩知事からもすばらしいご挨拶をいただきましたが、県であったり、あるいは市であったり、あるいは市民の皆さんであったり、一緒に取り組むことが一番いい形だとみんな思っていると思うんです。そのような中で、大臣がご覧になって、自治体に期待すること、自治体だからこそこんなことができるのではないかなど、自治体の可能性や役割について、何かお話があったらお聞きしたいと思います。

岸田外務大臣

【核兵器廃絶に向けて自治体に期待する役割や可能性】

核兵器のない世界を目指す、今、世界はこういった大きな目標のために努力をしています。その中で、我が国は、唯一の戦争被爆国として国際的な議論をリードしなければならないと考えており、その取り組みについては、先ほどご紹介したとおりです。

もちろん、日本政府としましても、しっかりと役割を果たしていかなければなりませんが、政府が思い切ってこうした取り組みに向けて努力するためにも、国民の皆さん一人ひとりの理解というものは欠かすことができません。お一人おひとりにしっかり理解していただき、そして、応援していただくからこそ、政府としましても思い切った取り組みができるのだと思います。こうした一人ひとりの国民の皆さんの理解ということを考える際、やはり国民にとって一番身近な行政組織である地方自治体の役割は、大変重要ではないかと考えます。国民一人ひとりの理解、あるいは取組みが大事だという観点

からも、先ほど紹介させていただいた 4 月の NPDI 外相会合において、市民の皆さんとの意見交流会を開催させていただきました。田上市長さん及び松井市長さんをはじめ、NGO 関係者の皆さん、被爆者の方々、さらには、NPDI 参加国の高校生の皆さんにも参加していただき、意見交換をさせていただきました。オーストラリアとオランダの外務大臣は，この意見交流会について大変感激したという感想をおっしゃっておりました。やはり一人ひとりの思いや力が大切だと思いますし、そのために、地方自治体の役割が大変重要だと考えます。

そして、旧来からも、地方自治体の取り組みが大変重要であり、こうした取り組みを考えていただく機会として、国連軍縮会議という国際会議があります。この国連軍縮会議は，過去 20 年以上にわたり、日本の地方自治体に受け入れていただいて、開催してきました。来年は、再び広島市にお願いすることになっています。しかし、残念ながら、近年は受け入れに手を挙げる自治体がだんだん少なくなっているということが指摘されています。ぜひ、この地方自治体の取り組みの大切さを再度考えていただき、こういった活動にもご協力をいただきたいと思っています。

こうした自治体の取組みと併せて、先ほど田上市長さんからもご紹介いただきましたが、「ユース非核特使」という取組みがあります。被爆者の方々に被爆の実相を伝えていただくことは大変重要ですが、被爆者の高齢化が進む中、世代と国境を越えて、これからも被爆の実相を伝えていただくために、高校生の皆さんを中心とした若い世代を「ユース非核特使」として委嘱し、核兵器の悲惨さをしっかり伝えていただこうといった取組みも行っています。こうした取組みにおいても、地方自治体の役割は、大変重要だと考えています。ぜひ、オールジャパンでこの問題に取り組んでいかなければいけないと考えており、その中で自治体の役割は大変重要であると感じています。ぜひ、引き続きお力添えをお願いしたいと心から願っています。

田上　長崎市長　　【まとめ】

ありがとうございました。長崎でも被爆者の方たちが自身の体験をずっと話してくださっていましたが、戦争体験のない豊かになった時代の人たちに、果たして通じるのだろうかという思いをずっと抱きながらお話しされていました。しかし、高校生などの若い人たちの活動が始まったときに、「伝わっていたんだ、今までやってきたことは無駄じゃなかったんだ」と、また元気に活動を続けられる力をもらったと被爆者の皆さんがおっしゃたんです。

また、先ほど黒岩知事からお話がありましたが、確かにアメリカでは、原爆投下が平和をもたらしたと教えられています。しかし、広島、長崎に実際に来てもらったり、見てもらったりすると、原子雲の下で何があったのか、核兵器はやっぱり人間には要らないものだとわかってくれる。そして、今回の NPDI 外相会合でも、実際に来られた首脳や、今回、国連の議長を務められたロマン・モレ―大使にしても、自分でご覧になり、話を聞かれて、そして、国連の場で、「広島と長崎を訪れてください」と言ってくださったわけです。ですから、伝わらないのではないかではなくて、「伝えれば伝わる」ということだろうと思います。

そして、長崎の高校生たちがいろいろな活動するときの合言葉、「微力だけど、無力じゃない」という言葉があるのですが、これは私たち非核協にとっての合言葉でもあって、決して大きな力じゃないかもしれないけれど続けること、それは確実に伝わっていって、いろいろな人たちが少しずつ変わってくれている。そして、先ほど鈴木市長がお話になったように、1,000 人の子どもたちが被爆地を訪れている。そういったことが、どこかで社会を変える力になってくれているのではないかなと思っています。

さて、そろそろ時間ですので、最後に、一言ずつだけお話をしていただきたいと思いますが、まず、大臣から。せっかく国会を抜けてきてくださったので、一言ではなく、二言ぐらいお願いします。

岸田外務大臣

今日は、本当に貴重な機会をいただきましてありがとうございます。こうした記念大会の取組みについて、心から感謝と敬意を申し上げたいと思います。

私も、日本の外務大臣の仕事をさせていただいていますが、日本の外務省、外務大臣の歴史というのは明治 2 年に始まっておりまして、私で、日本国 143 人目の外務大臣ですが、広島市出身の外務大臣は私が初めてでございます。こういった立場でもありますので、私自身も「核兵器のない世界」を目指すという大きな目標について、格別の思いを持って取り組まなければならないと思っています。

先ほど申し上げましたように、この問題はやはりオールジャパンで取り組まなければなりません。そして、世界には核兵器を持っている国をはじめ、いろいろな立場の国があります。核兵器を持っている国にも核兵器を減らし、なくしてもらうよう協力してもらう必要があり、世界中の国々が協力しなければ、軍縮・不拡散は実現できません。多くの皆さんの協力がなければなりません。

そのような観点からも、自治体の取り組みが大変重要だということを先ほど申し上げました。ぜひオールジャパンで、そして、世界の国々がそれぞれの立場で努力しなければならない「核兵器のない世界」という大きな目標に向けて、ぜひ自治体の皆様方にも、引き続き努力をいただきますよう、心からお願いを申し上げたいと思います。

田上　長崎市長

ありがとうございました。それでは、松井市長、一言。

松井　広島市長

戦後 69 年になり、広島、長崎の被爆者の平均年齢は 78 歳です。実際経験された方があとどれくらい生き続けられるかという中で、「絶対悪」である核兵器をなくしてもらいたいという被爆者の方々の思いを、今の世代と次の世代が、同じようにしっかり願ってほしいと思います。

世界では、経済や政治などいろいろな難しい状況がありますが、核兵器廃絶という目標を、ともに持とうとお願いしたいです。エンドレスだとなかなか力が入りませんので、オリンピックの年にも当たる 2020 年を目掛けて、みんなでもう一回気持ちを奮い立たせ、核兵器をなくそうと呼びかけているところです。核兵器廃絶に向けての喜ばしい動きは、広島、長崎の思いである、核兵器は人の道に反するものだとする核兵器の非人道性について、世界の国々の方々に改めて言っていただいていることです。

しかし、最終的な廃絶に向けて、さまざまな手法があります。手法でもめることなく、みんなが協力して、廃絶に向けて動こうとお願いしたい。なかなか成果が見えない、だらしないと NPT 体制を叱咤激励するのはいいですが、やはりそれも機能するようにやっていこうということです。核兵器は「絶対悪」だから違法とする非合法化、核兵器を持たない地域をつくっていく非核兵器地帯化、さまざまなやり方がありますが、どれが優れていて、どれがだめだというものではなく、廃絶に向けて、それぞれの状況に応じて、それらをうまく組み合わせながら、みんなで力を合わせて核兵器廃絶への道をしっかり歩みたいと思います。

繰り返しますけが、被爆された方々の願い、広島の思いをぜひ心に受けとめて、皆さんにいろいろな形で協力をお願いしたいと思います。

田上　長崎市長

ありがとうございました。最後に、鈴木市長、一言お願いします。

鈴木　藤沢市長

被爆地でない都市として、30 周年記念大会が開かれた意義を、こうして多くの皆さんと共有できることに、心より感謝を申し上げます。私どもも、まだまだ学ぶべき部分がたくさんございます。大会を契機として、より一層絆を強く

し、広島・長崎以外の自治体が、限りなく同じ気持ちで核兵器廃絶に向かって、取り組むことができたら、本当に素晴らしいと思います。ともに頑張りましょう。

田上　長崎市長

ありがとうございました。私が最後に言いたいことは、鈴木市長が言ってくださったので、以下同文です。

非核協の仲間は、これからも平和のまちづくりをしようとそれぞれ誓ったまちの集まりですので、一緒に力を合わせて、40 周年を目指してこれからも行動していきたいと思います。

最後に、「ノーモア・ヒロシマ、ノーモア・ナガサキ」という言葉がありますが、これはとても大事な言葉で、二度と世界中のだれにも経験させたくないという大きな心の原点になっている言葉です。

もう 1 つ、もう随分昔の昭和 24 年ぐらいに長崎で生まれた「ピース・フロム・長崎」という言葉があります。もちろん、「ピース・フロム・広島」でもありますが、繰り返さないということだけではなく、この言葉のように、力を合わせ自分たちのまちを平和なまちにしていこうということが、もう 1 つの大きなエネルギー源になるのではないかと思います。この後の大林監督のお話のタイトルも「ピース・フロム・藤沢」ですが、「ピース・フロム・藤沢」というように、世界中のまちの名前が入ります。この言葉も皆さんと共有しながら、これからも非核協の活動、そして、藤沢の市民の皆さんが継続しているレベルの高い活動などいろいろな活動を、皆さんと一緒に続けていきたいと思います。

今日は、お忙しい中かけつけてくださった岸田外務大臣に、改めて感謝を申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

松井　広島市長

1 つだけ宣伝なのですが、先ほど鈴木市長さんが折り鶴でいろいろなものを加工しているとおっしゃいましたが、私も、平和記念公園の「原爆の子の像」に捧げられた折り鶴を再生紙として名刺に使っているんです。もしよろしければ、日々、こういうものを身近に置きたいと願われる方は、広島市に注文していただきたいと思いまして、よろしくお願いいたします。

田上　長崎市長　　【質問コーナー】

質問コーナーがあったんでした、申し訳ない。中学生の皆さんから質問があると聞いていたのですが、大臣、時間大丈夫ですか。どうぞ。

藤沢市立善行中学校生徒

今日は貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。僕も、善行中学校の多くの生徒も、核兵器は絶対に持ってはいけないと思っています。だからこそ、核兵器を捨てさせ、平和な社会を目指すための一歩として、今こうして、平和について学んでいます。

先ほど黒岩知事のお話にもありましたが、僕としては、核兵器について、日本側ばかりではなく、原爆を投下した側のアメリカの考え方をもう少し詳しく知りたいのです。岸田大臣が知っている範囲で教えてください。また、岸田大臣がどのようにお考えかも教えてください。

岸田外務大臣

どうも、優秀なご質問をありがとう。まず、この核の問題について、今から 69 年前、悲惨な出来事があったわけですが、今、私たちが取り組むに当たって、こうした課題は、日本だとかアメリカだとか、立場に基づいて取り組むのではなく、やはり人類全体で、未来に向けて取り組まなければならない課題だと思っています。

今、この国際社会においては、NPT 体制の中で核兵器国として認められている国が 5 つあるわけですが、この 5 つの国にもやはり「核兵器のない世界」に向けて協力をしてもらわなければなりません。実は、アメリカも、オバマ大統領が「核兵器のない世界」を目指すと高らかに宣言しています。こうした活動を通じて、オバマ大統領自身もノーベル平和賞を受賞している

ので、アメリカも率先してこの課題に取り組んでもらわなければなりません。

そして、この大きな目標に向けて、みんなで前進しなければいけないのですが、残念ながら、被爆 69 年が経って、まだ世界には 1 万 7 千発の核兵器が存在し、その解決は簡単なことではありません。例えば、核兵器を持っている国には、まずは核兵器を減らす、なくす前提として、自らの核兵器の状態の透明性を高めてもらう必要があります。実際、どれだけの核兵器を持っているのかをしっかり明らかにしてもらわなければならないということで、核兵器を持っていない 12 か国で構成する NPDI という枠組で、実際の核兵器の状況を報告してもらうフォーマット、様式をつくって、核兵器国に送る取り組みも行っています。ぜひ日本もアメリカも「核兵器のない世界」を実現するために努力するべきであると考えています。

田上　長崎市長

ありがとうございました。岸田大臣のお答えでした。

これで、申し訳ないのですが、時間超過していますので、このあたりで終わらせていただきたいと思いますが、もし、皆さん、何かほかにお尋ねしたいことがあれば、事務局にお寄せいただければ、きっと大臣に答えていただけると思います。

では、以上で、トークセッション終わりたいと思います。ありがとうございました。

第 2 部オープニングアトラクション　記念演奏

長崎平和特派員 Deux Marchés （ドゥ マルシェ）

【プロフィール】
2004 年、牧 千恵子（まき ちえこ）と Miyack（みやっく）が、世界中のより多くの「出会い」を求めて結成。情熱のヴァイオリンと魅惑のアコーディオンで、“新鮮な音の市場”を展開。時に踊り、時には歌い、時には涙しながら奏でる姿は人々の心を熱くする。
2011 年、被爆者下平 作江さんの言葉からインスパイヤされた曲「生きて」を作曲し、「長崎平和特派員」に認定。2012 年スペイン　ゲルニカ・ルモ市の無差別爆撃 75 周年追悼式典及び平和コンサートに招聘。長崎市民（被爆者）とゲルニカ市民と平和効力協定書を取り交わし、立会人として署名。
2005 年からペルー極貧街の子供たちへの栄養支援「砂漠の一滴」会も続けている。

第 2 部は、長崎平和特派員として活躍されている Deux Marchés（ドゥ・マルシェ）の素敵な音楽からスタートしました。

1 曲目の『生きて～Vivir』は、長崎市の被爆者、下平 作江さんの話を聞き、被爆のケロイドと後遺症に苦しんで亡くなった妹さんの記憶や、強く生きてきた下平さん自身の歩みに衝撃を受け、さらに、浦上天主堂の被爆マリア像に感銘を受けて作曲された楽曲です。お二人は関東のご出身ですが、実際に聞いた被爆者のお話はとても心に響いたそうです。

2 曲目の『輝きの時～La Alegria』は、『生きて～Vivir』の曲の続編とも言える曲で、スペイン内戦の際にドイツ軍の激しい爆撃を受けたことで知られるスペイン・ゲルニカルモ市を長崎の被爆者と一緒に訪れたときに作られました。つらい思い出の後に、平和で喜びに満ちた輝ける時代を一緒に生きていけますように、そんなお二人の願いが詰まった曲です。

お二人は国内にとどまらず、海外でも演奏活動をされていますが、海外では「平和でなければ、音楽を楽しむ気持ちになることは難しい」と痛感されるそうです。言語が通じなくても、音楽は世界どこにいても伝える力があります。これからも音楽を通して、世界中で命の尊さや平和のすばらしさを伝えていきたいというお二人の思いも聞かせていただきました。

長崎市では、海外にいながら、さまざまな分野で平和の推進活動に取り組む方を長崎平和特派員に認定し、その活躍を支援しています。平成 26 年 6 月 2 日現在、18 名の方が特派員として活躍しています。

記念講演「ピース・フロム・藤沢」

映画作家 大林 宣彦 氏

【プロフィール】
1938 年広島県尾道市生まれ。３歳の時に自宅の納戸で出合った活動写真機で、個人映画の製作を始める。自主映画・テレビＣＭの制作を経て、77 年「HOUSE」で商業映画に進出。同年 ブルーリボン新人賞を受賞。代表作「転校生」「時をかける少女」「さびしんぼう」は“尾道三部作”と称され親しまれている。
昨年８月には、新潟県の長岡花火を題材にした映画「この空の花 - 長岡花火物語」の上映会・舞台挨拶のため長崎を訪問され、日本非核宣言自治体協議会の事業である「親子記者」の取材にご協力いただいた。最近では、北海道芦別市を舞台にしたふるさと映画「野のななのか」が全国順次公開中。
2004 年春の紫綬褒章受章、2009 年秋の旭日小綬章受章。

映画作家の大林 宣彦氏に「ピース・フロム・藤沢」と題して、ご講演をいただき、新潟県長岡市で毎年８月１日、長岡空襲が始まった時刻に合わせて打ち上げられる慰霊の花火を題材にした映画「この空の花 - 長岡花火物語」の制作に込められた思いなどを語っていただきました。

ご講演くださった大林氏

名作「長岡の花火」を遺した画家の山下 清さんの「世界中の人間が、爆弾ではなくて、花火をつくったら、世界から戦争がなくなるのになあ」という言葉も紹介され、「人間がいつまでも美しい心を持っていれば、世界の平和がつくれるかもしれない。政治も経済も宗教も戦争になるけれど、芸術だけはお互いの個性を慈しみ合いながらともに生きるという平和を持っていて、そんな仲間づくりが、東日本大震災からの復興や平和な世界につながっていくのではないか」と語ってくださいました。

大林氏と一緒に「I Love You」を意味するピースサインをする善行中学校の皆さん

講演の最後には、写真を撮るときの定番のポーズ「V サイン」の意味が、「V for Victory（勝利の V）」であることも紹介され、世界共通の手話で「I Love You」を意味するポーズを使い、平和な世界にしましょうと呼びかけられました。

記念合唱

私立湘南白百合学園中学・高等学校コーラス部

【プロフィール】
私立湘南白百合学園中学・高等学校コーラス部は、約 60 名のメンバーで、宗教曲からミュージカルまで、幅広く活動をされている。毎年、研修旅行で長崎を訪問し、平和学習に熱心に取り組まれているほか、藤沢市の「平和学習・長崎派遣事業」にも積極的に参加をされている。

私立湘南白百合学園中学･高等学校コーラス部の皆さんが、『藤沢市歌』と長崎原爆死没者慰霊平和祈念式典でも毎年歌われる『千羽鶴（長崎被爆 50 周年記念歌)』を、心を込めて歌ってくださいました。

全国首長リレートーク「2 分 1 本勝負」

邑上 守正 東京都武蔵野市長
平井 竜一 神奈川県逗子市長
淺利 敬一郎 大阪府豊中市長
竹内 脩 大阪府枚方市長

邑上　武蔵野市長

皆様、こんにちは。東京都の武蔵野市長、邑上でございます。

私どもの自治体も、藤沢市さんと同じように、1982 年に、非核都市宣言を行い、32 年目を迎えました。ちょうど 25 周年記念のときに、もっと市民参加で平和事業ができないかということで、非核都市宣言平和事業実行委員会という組織を市民参加でつくって以来、この実行委員会を主体として、多くの平和事業を行ってきました。

また、武蔵野市は、戦時中に、中島飛行機武蔵製作所という大きな軍需工場がありました。ゼロ戦のエンジンをつくっていた工場で、それがあったために、本土で初空襲を受けることになります。昭和 19 年 11 月 24 日でありました。今では、この 11 月 24 日を武蔵野市平和の日に制定し、戦争の歴史を子どもたちに伝え、平和の大切さを学ぶ日としております。また、5 月には平和憲法を学ぼう、8 月には非核を学ぼうと、年間を通じてさまざまな事業を行っているところです。ぜひ、多くの自治体が平和の日を制定いただき、1 年中、365 日、どこかが平和の日だということで、平和の日をつなげていきたいと思っております。

これからも自治体が連携をして、国内だけではなく世界中の都市が手をとりながら、戦争も核兵器もない平和な未来を今の子どもたちに、そして、未来の子どもたちにつなげていきたいと思っています。

以上です。それでは、逗子市長の平井市長さんにバトンタッチします。

平井　逗子市長

皆様、こんにちは。藤沢のお隣のお隣で、逗子市からやってまいりました平井と申します。

逗子市が非核協に加盟したのは平成 2 年のことでありまして、その翌年から、ピースメッセンジャー派遣事業を始めました。今では、中学校 2 年生を 20 名、広島と長崎に交互に派遣して、今年は広島に 20 名の中学生がお世話になる予定でございます。40 年前、逗子市は「青い海とみどり豊かな平和都市」という都市宣言をしました。実は、逗子市には戦前から戦後、弾薬庫がありました。戦前は日本軍の、戦後は在日米軍の弾薬庫として、まさに戦争と隣り合わせのまちでした。戦後には爆発事故もあって、まさに日常生活に戦争の危険があったまちでした。そういった歴

史的な背景から、平和都市を宣言したのが 40 年前、そして、ピースメッセンジャー派遣事業などを重ねながら、市制 50 周年、ちょうど 10 年前に非核平和都市宣言をしました。

今年は市制 60 周年ということで、市内のいろいろな場所でこの周年事業を行っていますが、非核平和都市としても 10 周年、広島からちょうだいした被爆アオギリ二世を市内のすべての中学校に記念植樹をする予定になっております。毎年、ずし平和デーという市民団体が企画する平和イベントで、中学生が学んだことを発表して、平和の尊さ、核兵器の恐ろしさというものを後世に伝えていこうと取り組みを重ねております。

先ほど松井市長が 2020 ビジョンというお話をされましたが、まさに東京オリンピック、パラリンピックの年に、核兵器のない世界を目指した発信をこの日本からするという大変貴重な機会になるのではないかと思っています。そのためには、私たち自治体、そして、市民の皆様が手を結んで、世界とつながって、平和を目指す取り組みを、この 30 周年大会を機に一層強めていければと思っております。今後とも、皆様と連帯してまいりましょう。ありがとうございました。

それでは、続いて、豊中市の淺利市長、よろしくお願いいたします。

淺利　豊中市長

私は、子どもたちの取り組みに絞ってご報告をいたします。

まず、昨年、親子記者事業の近畿地区代表として、長崎市に本市の親子が訪問をさせていただきました。お母さんと 5 年生の男の子だったんですが、随分悩みながら、スタッフの皆さんのサポートも受けながら、オリバーストーン監督の取材をさせていただいたということで、市役所にも報告に来てくれました。また、学校でもしっかりと体験したこと、経験したことを報告されたそうです。これが昨年でございます。

今年、豊中市が沖縄市と兄弟都市提携をして 40 年になる記念に、沖縄の子どもたちに豊中市にお越しいただき、『コザ物語』というオリジナルの市民ミュージカルを演じていただく。本市からは、中学生を平和大使として沖縄市に派遣し、沖縄の平和学習について学ぶという取り組みを進めてまいります。

最後に、『にんげんをかえせ』の原爆詩集で知られる峠 三吉さんが、豊中市のお生まれということで、戦後 50 年に私どもの図書館の前に碑を建てさせていただいて、それをベースに、小・中学生が学んでおります。また、豊中市の小学校が 41 校あるんですが、その 6 年生の児童が毎年、広島に修学旅行に行かせていただいて、平和について学んでいます。これも原爆詩集をベースに進めさせていただいています。

以上、子どもたちの取り組みを報告させていただきました。ありがとうございました。

次に、枚方市の竹内 脩市長さん、よろしくお願いいたします。

竹内　枚方市長

大阪府枚方市長の竹内 脩でございます。

枚方市の場所がどこかわからないと思いますので紹介しますが、ちょうど大阪と京都の中間点に所在しております。近畿の母なる川、淀川の左岸に広がる丘陵地のまちでございます。戦前は、火薬庫が存在するとともに、砲弾を製造する日本有数の製造所がございました。昭和 14（1939）年 3 月 1 日にその火薬庫が大爆発を起こし、一昼夜爆発音が響いたということであります。枚方市民を中心に約 700 名の方が死傷されました。枚方市は大きな空襲の体験はございませんが、枚方のまちにとって、この火薬庫の大爆発が我々の先輩たちにとって一番大きな戦争体験、市民レベルにおける戦争体験でした。この経験を踏まえ、戦後は常に平和を希求するという動きがございまして、3 月 1 日を「枚方市平和の日」と定め、いろいろな平和を考える集いを行ってまいりました。

今から 4 年前の 2010 年、長崎市長、広島市長、藤沢市長と一緒にニューヨークで開催された NPT 再検討会議に行かせていただき、ニューヨークの学校とコロンビア大学で、日本人の留学生も含めて、大学生たちに原爆の話をしました。その折にショックを受けたのが、日本の若者たちが見事に原爆のことを知らない。もう過去のこと、全然関係のない世界にあるような感じを受け、非常にショックを受けて、帰ってきた次第です。それ以来、枚方市では改めて、平和の日の事業の在り方を見直し、市民の皆さんに具体的な行動を呼びかけようということで、キャンドルカップに灯をともす平和の燈火（あかり）事業をやっております。約 2,000 個から開始しましたが、今年は 1 万 2,000 個にまで増えました。広島市の松井市長、長崎市の田上市長にもキャンドルカップにメッセージをいただきました。市民の皆さんに具体的な行動を働きかけて、枚方から、平和の大事さ、平和の尊さ、そして、核兵器廃絶に向けた大きなうねりをつくり出す、その一翼として頑張っていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

エンディング

会場に集まった全員で「手のひらを太陽に」を合唱し、核兵器のない世界を目指して連携していくことを誓いました。

会長の田上長崎市長、鈴木藤沢市長をはじめ、参加された首長にもご登壇いただきました。私立湘南白百合学園中学・高等学校コーラス部の皆さんは振り付けをしながら、盛り上げてくださいました。

関連企画

「核兵器なき世界への連帯－勇気と希望の選択」展

創価学会インタナショナル（SGI）

創価学会インタナショナル（SGI）が核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）の協力を得て制作した「核兵器なき世界への連帯－勇気と希望の選択」展が、第2展示集会ホール（藤沢市民会館1階）で開催され、日本非核宣言自治体協議会設立30周年記念大会に参加した56自治体のほか、多くの市民などが観覧しました。この企画展は、人道、環境、経済、人権、ジェンダー、倫理など、様々な視点から核兵器の問題について考え、それに対し国際的にどのような取り組みがなされているかを紹介するものです。平成26年6月2日現在、世界9カ国13都市で開催され、核兵器廃絶に向けた様々な運動分野の連帯を訴えています。

開幕式では、主催者を代表し、奥田 亮一 実行委員長（創価学会湘南総県男子部長）が挨拶をし、田上 富久 長崎市長や鈴木 恒夫 藤沢市長が祝辞を述べました。

また、テープカットには、中村 雄子 神奈川県原爆被災者の会会長、山崎 一久 創価学会総神奈川長、橋元 太郎 創価学会全国青年部長、宗前 裕子 創価学会総神奈川女子部長も参加しました。

設立 30 周年記念レセプション

記念大会後には、第 1 展示集会ホール（藤沢市民会館 2 階）において、設立 30 周年記念レセプションが開催され、多くの会員自治体が参加し、交流を深めました。

藤沢市の PR と活性化のため、市内外のイベントで活躍されている太鼓集団「ふじ」の華やかな歓迎太鼓、記念大会に続いてご出演いただいた長崎平和特派員 Deux Marchés （ドゥ マルシェ）のお二人による素敵な演奏が会場に華を添えました。

また、藤沢市は、実は全国有数のワインの出荷と生産を誇る都市であること、また、大地にしっかりと根ざすブドウの木、そして日々の素晴らしさを実感させてくれるワインは、「平和の象徴」ともいえることから、大会の趣旨に賛同した地元のメルシャン株式会社 藤沢工場様よりご提供いただいた国産デイリーワインでの乾杯に引き続き、藤沢の特産品を使った料理や地元ならではのお酒がふるまわれました。

さらに、藤沢市では、優れた技術を持ち、市民生活や産業の発展を支えている最高峰の匠を、「藤沢マイスター」として認定していますが、当マイスターに認定された、フラワーデザインの和田 晃一さんが、会場を生花でダイナミックかつ繊細に彩るとともに、洋菓子製造の渡部 昭さんは、非核協 30 周年を鮮やかなスペシャルケーキで祝し、また、藤沢商工会議所のご協力により、名産品・特産品ブースが紹介されるなど、“藤沢市らしいおもてなし”で来場者をあたたかく迎えてくれました。

オープニングを飾っていただいた太鼓集団「ふじ」の皆さん

ご挨拶いただいた竹内 脩 枚方市長

非核協設立 30 周年記念大会のために、多くの首長様にもご出席いただきました

設立 30 周年記念大会等参加者数

	時　間	場　所	行 事 名	参 加 者 数
6 月 2 日（月）	11：30～12：00	第 2 会議室	26 年度第 1 回役員会	22 自治体　30 人
	13：00～13：45	第 1 展示集会ホール	第 31 回総会	67 自治体　95 人
	14：00～17：15	小ホール	設立 30 周年記念大会	・82 自治体　168 人 ・一般 138 人 ・報道 17 社 31 人 ・出演者等関係者 48 人 【計 385 人】 ※ 一般定員 150 人事前申込制。168 人応募、落選者なし ※ 自治体関係者のうち、首長、議長等は 33 人 ※ 神奈川県内から、神奈川県、及び 19 市町が参加
	・一般 10：15～17：00 ・自治体関係者 17：30～18：00	第 2 展示集会ホール	パネル展示観覧	・56 自治体　149 人 ・一般　約 300 人 ※ パネル展示は入場自由。
	18：15～19：45	第 1 展示集会ホール	記念レセプション	34 自治体　90 人
6 月 3 日（火）	9：15～12：30	・武田薬品工業㈱湘南研究所 ・湘南江の島周辺 ・Fujisawa ｻｽﾃｨﾅﾌﾞﾙ・ｽﾏｰﾄﾀｳﾝ	藤沢市内視察	24 自治体　39 人

広報ふじさわ 4月25日号

2014年(平成26年)
4/25
NO.1534
広報ふじさわ
藤沢市コールセンター
☎0466(28)1000
午前8時～午後9時
(年中無休)
発行日 毎月10日・25日
編 集 藤沢市広報課
〒251-8601 朝日町1-1
☎0466(25)1111
〈休日・夜間は☎0466(25)1114〉
http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp

4月1日現在の推計人口418,308人(男207,359人、女210,949人) 世帯数179,380世帯

本市が副会長を務める日本非核宣言自治体協議会が設立30周年を迎えました。その記念大会が、被爆地以外では初めて本市で開催されます。平和について共に考えてみませんか。
問い合わせ
平和国際課☎内線2162

日本非核宣言自治体協議会設立30周年記念大会が開催されます

藤沢から広げよう 平和の輪

日本非核宣言自治体協議会設立30周年記念大会
「連帯する自治体～被爆地でない都市の役割と可能性」

と き 6月2日㈪午後2時～5時30分
ところ 市民会館
対象・定員 小学生以上の方約150人(抽選)
内 容
☆トークセッション(長崎市長、広島市長など)
☆記念講演「ピース・フロム・藤沢」
(講師＝映画作家大林宣彦氏)
☆書家金澤翔子さんによる席上揮毫(きごう)
☆記念演奏(長崎平和特派員ドゥ・マルシェ)
☆平和学習発表(善行中学校)
☆記念合唱(湘南白百合学園中学・高校)など
※手話通訳あり

▲金澤翔子氏

◀大林宣彦氏

申し込み・問い合わせ
5月15日㈭〈必着〉までに、はがき・ファクスまたはEメールに、「非核協30周年記念大会」、住所・氏名(ふりがな)・年齢・性別・電話番号・ファクス番号・Eメールアドレスを書いて、平和国際課〈〒251-8601 朝日町1-1〉☎(24)5928、✉heiwakokusai@city.fujisawa.kanagawa.jpへ

日本非核宣言自治体協議会とは

1984年設立(会長・長崎市)。核兵器廃絶や非核三原則の遵守を求める宣言などを行った自治体約300団体で構成され、国際会議への出席や核実験に対する抗議活動などを展開しています。
本市では全国に先駆けて1982年に「藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言」を行い、以降先進的に平和事業に取り組んできました。同協議会では設立初期に会長を務めるなど、中心的な役割を担っています。

平和基金にご協力ください

核兵器の廃絶と恒久平和の実現を目指して、継続的に平和事業を推進するため、平和基金への寄付を募っています。

神奈川県全域・東京都町田市の地域情報誌
タウンニュース 2014年5月9日号

非核協30周年
記念大会

藤沢から平和の輪広げ

被爆地以外で初開催

「日本非核宣言自治体協議会」（通称・非核協／会長・長崎市）の設立30周年記念大会が6月2日(月)に藤沢市で行われる。被爆地以外の都市での開催は初めてのこと。市民の参加も募り、加盟自治体によるトークセッションや講演などを通して、被爆地でない都市の役割と可能性や平和について考える。

講演する大林宣彦氏

1984年に広島県府中町で設立され、国際会議への出席やNGOとの連携、核実験に対する抗議活動などを行っている非核協。2014年4月1日現在、核兵器廃絶などを求める宣言や議決を行った全国299の自治体が加盟している。

藤沢市は1982年に市民約7千人分の署名を受けて、全国に先駆け「藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言」を制定。非核協には設立と同時に加盟した。2年後の86年には会長を担い、現在も副会長を務めている。

こうした功績のほか、現会長の長崎市と日ごろから「平和学習・長崎派遣事業」や「被爆体験講話会」などで連携や交流を図っていること、「今後は被爆地でない都市でも非核協の活動を広めていきたい」という同市の思いに賛同したことから、今回の開催が実現した。

市平和国際課は「今年は藤沢市民憲章50周年の年でもある。この記念大会が平和への願いや行動を前進させるとともに、人の輪がつながり、発信するきっかけになれば。1人でも多くの人に参加してもらいたい」と話している。

地元中・高校も登壇

30周年記念大会のキーワードは「連帯する自治体～被爆地でない都市の役割と可能性」。加盟自治体関係者のほか、小学生以上を対象に一般からも約150人の参加を募る。会場は藤沢市民会館、午後2時から5時30分。手話通訳あり。

第1部では、書家の金澤翔子さんによる席上揮毫のほか、善行中学校による平和学習発表、被爆地・広島市や長崎市などによるトークセッションを行う。

2部では映画作家の大林宣彦さんが「ピース・フロム・藤沢」と題し、講演。私立湘南白百合学園中・高等学校が合唱を披露する。

金澤翔子氏の席上揮毫も

参加希望者ははがきかファクス、メールに「非核協30周年記念大会」、住所、氏名（ふりがな）、年齢、性別、電話番号、ファクス番号、メールアドレスを明記し、〒251－8601朝日町1の1またはFAX0466・24・5928、✉heiwakokusai@city.fujisawa.kanagawa.jp平和国際課へ。5月15日(木)必着。応募者多数の場合は抽選。

参加者には長崎や広島へ平和を祈念して全国から寄せられた折り鶴の再生紙で作った記念品が配られる。

問い合わせは同課☎0466・25・1111（内線2162）へ。

2014年5月9日 朝日新聞

■非核自治体、藤沢へ

核兵器廃絶を求める自治体宣言や議会決議をした全国299の自治体でつくる「日本非核宣言自治体協議会」（非核協）の設立30周年記念大会が6月2日、藤沢市民会館で開かれる。藤沢市によると、同日の総会も含め、被爆地以外での開催は初めて。記念大会には、藤沢市民に限らず一般の人も入場できる。

藤沢市は1982年、全国で7番目に非核自治体を宣言。非核協設立後は同市の市長が86年から2000年まで会長を務め、会長が長崎市長に替わった後も副会長を務めている。

首都圏で初となる今回の大会では、書家の金澤翔子さんによる揮毫（きごう）、トークセッション、映画監督の大林宣彦さんの「ピース・フロム・藤沢」と題した講演などが予定されている。

定員は150人。入場希望者は15日までに、はがきかファクス、メールで、市平和国際課に申し込む。問い合わせは同課（0466・50・3550）へ。

2014年5月12日 毎日新聞

非核協30年大会 藤沢で来月2日

核兵器廃絶などを求める自治体宣言や議会決議をした自治体でつくる「日本非核宣言自治体協議会」（非核協）の設立30周年記念大会が6月2日、藤沢市民会館で開かれる。被爆地以外では初の大会開催で、同市は一般来場者150人を15日まで募集している。

非核協は1984年に設立。299自治体で構成し、会長は長崎市長。藤沢市は82年に「核兵器廃絶平和都市宣言」を全国で7番目に制定し、市長が副会長を務めている。

記念大会は広島、長崎市長らによるトークセッションのほか、書家の金澤翔子さんによる揮毫、藤沢市立善行中生徒による平和学習の活動報告、映画監督の大林宣彦さんの講演「ピース・フロム・藤沢」などが予定されている。

小学生以上なら同市民以外でも来場できる。はがきかファクス、メールで市平和国際課へ申し込む。応募者多数の場合は抽選。問い合わせは同課（0466・50・3550）。【塚本泉】

2014年5月14日 東京新聞

303自治体加盟「非核協」設立30周年で記念大会

藤沢で来月2日、来場者募集

核兵器廃絶や非核三原則の順守などを求める内容の自治体宣言や議会決議をした自治体でつくる「日本非核宣言自治体協議会」（非核協）は6月2日、藤沢市民会館（同市鵠沼東）で「設立30周年記念大会」を開く。

1984年に設立された非核協には現在、全国の303自治体が加盟。長崎市長を会長とし、藤沢市の鈴木恒夫市長を含む広島市、那覇市など5市長が副会長を務める。神奈川県は、県と7市2町が会員となっている。

30周年記念大会では、映画監督の大林宣彦さんによる講演をはじめ、広島、長崎両市長に鈴木市長を交えた対談、広島を訪れた藤沢市立善行中学校生徒の平和学習活動報告、湘南白百合学園中学・高校の合唱などが行われる。

藤沢市は、一般来場者150人を15日まで募集している。問い合わせは、市平和国際課＝電0466(50)3550＝へ。

2014年5月29日 朝日新聞

非核協30年大会に岸田外相が出席へ

藤沢市で6月2日に開かれる「日本非核宣言自治体協議会（非核協）」設立30周年記念大会に岸田文雄外相が出席する。同市が28日に発表した。外相は大会第1部「日本と国際社会の平和と安定に向けた取り組み」と題したトークセッションに出席、田上富久・長崎市長が司会役を務め、松井一実・広島市長、鈴木恒夫・藤沢市長と討議する。

2014年6月3日 東京新聞

非核協大会 藤沢で開催

被爆地以外で初

核兵器廃絶や非核三原則の順守などを求める自治体宣言や議会決議をした自治体でつくる「日本非核宣言自治体協議会」（非核協）は二日、神奈川県藤沢市で「設立三十周年記念大会」を開いた。計八十二自治体から首長などが出席し、核兵器のない世界の実現に向けて協力する方向性をあらためて確認した。非核協の記念大会や総会が被爆地の長崎、広島以外で開かれるのは初めて。

非核協会長を務める長崎市の田上富久市長は、核廃絶を世界に訴えていくことについて「広島と長崎だけでは伝わりにくく、（原爆が）過去の出来事と捉えられがちだ」と指摘。被爆地でない自治体との協力関係の重要性を訴えた。

これに対し、開催市である藤沢市の鈴木恒夫市長は「核廃絶は連帯して取り組んでいくことが大切だ」と応えた。このほか、藤沢市立善行中学校の生徒が平和学習の成果を発表した。

核廃絶に向けた取り組みについて話し合う（左から）長崎市の田上市長、岸田外相、広島市の松井市長、神奈川県藤沢市の鈴木市長＝2日、藤沢市で

2014年6月3日 神奈川新聞

藤沢で非核協30周年記念大会

廃絶 オールジャパンで

トークセッションで核廃絶の取り組みについて意見交換する（左から）田上長崎市長、岸田外相、松井広島市長、鈴木藤沢市長＝藤沢市民会館

日本非核宣言自治体協議会（非核協）の設立30周年記念大会が2日、藤沢市鵠沼東の藤沢市民会館で開かれた。広島、長崎両市長を迎えたトークセッションには岸田文雄外相も出席。核廃絶について、「オールジャパンで取り組むべき課題で自治体の役割は重要」と述べ、協力を呼び掛けた。（高田 俊吾）

岸田外相は、核廃絶に向け「核兵器の非人道性」という側面を強調し、さまざまな立場の国々の結束を試みる政府戦略を説明。「こうした活動に政府が思い切って取り組むには国民の理解が不可欠」とした上で、「人々の思いを動かしていくためにも自治体の役割は重要だ」と訴えた。

松井一実広島市長は、核兵器禁止条約の必要性を強調。「きのこ雲の下で起こった人の道にもとる行為を再び起こさないため何ができるのか、各国の為政者に考えてもらえることを進めたい。核兵器は絶対悪と心に刻み、多くの人に尽力してもらえることが広島の願いだ」と力説した。

開催都市として登壇した鈴木恒夫藤沢市長は、被爆地ではない都市の役割について指摘。広島、長崎に藤沢の子どもたちを派遣する平和学習の取り組みも紹介しながら、「各都市が情報交換しながら、互いの取り組みを高め合っていければ」と思いを述べた。

進行役を務めた田上富久長崎市長は「『微力だけど無力じゃない』という言葉が、非核協にとっての合言葉。決して大きな力ではないが、それは確実に伝わり社会を変えていく力になる」と鼓舞した。

非核協は、核兵器廃絶などを求める自治体宣言や議会決議を行った全国303自治体で構成。記念大会は20周年時に長崎市で初めて開かれた。

今回の30周年大会は「連帯する自治体～被爆地でない都市の役割と可能性」をテーマに、非核協副会長都市の藤沢市で開催。被爆地ではない都市として初めてで、約400人が参加した。

2014年6月3日 讀賣新聞

非核協設立30年記念 藤沢で平和考える

非核宣言を行った自治体でつくる「日本非核宣言自治体協議会」の設立30周年記念大会が2日、藤沢市の市民会館で開かれ、各自治体の関係者や藤沢市民ら約380人が核兵器廃絶や平和への道筋について考えた。

同協議会は、全国の299自治体（今年4月1日現在）が加盟しており、記念大会は20周年で長崎市で開かれて以来2回目。被爆地以外の都市の役割や可能性を探ろうと、長崎市と平和学習事業などで交流がある藤沢市で開催した。

トークセッションでは、岸田外相や広島、長崎、藤沢の3市長が参加。藤沢市の鈴木恒夫市長は「絆を一層強くし、核兵器廃絶に向けて取り組んでいきたい」と応えた。大会では、映画監督・大林宣彦さんの講演や、市立善行中学校の生徒による平和学習発表も行われた。

2014年6月3日 神奈川新聞

被爆クスノキ2世苗木 長崎市長が見学 藤沢市

日本非核宣言自治体協議会に合わせて藤沢市を訪れた長崎市の田上富久市長が2日、藤沢市民会館（藤沢市鵠沼東）の前庭に植樹された被爆クスノキ2世の苗木を見学した。

長崎市の山王神社の境内にあるクスノキは、原爆の投下で枯れ木同然となったが、その2年後には新芽を吹き枝葉を広げた。苗木はこのクスノキの種子から育てたもので、2010年に藤沢市制70周年を記念して長崎市から贈られた。

この日、田上市長は鈴木恒夫藤沢市長の案内で植樹場所を訪問。平和の象徴として贈った苗木の青々とした姿に、「被爆クスノキは長崎では希望と勇気を与えてくれる存在。同じように藤沢でも、多くの人に希望と勇気を与えてくれるでしょう」と語った。

最近では長崎市出身の歌手・福山雅治さんが被爆クスノキを楽曲で取り上げて注目を浴びたこともあり、田上市長は「あのような歌をきっかけに、この木の意味を多くの若い人に知ってほしい」と願った。（高田 俊吾）

青々と茂る被爆クスノキ2世の葉に触れる田上長崎市長（左）と鈴木藤沢市長 ＝藤沢市民会館

2014年6月4日 毎日新聞

非核宣言自治体協議会 藤沢市で30周年大会

被爆地外で初 岸田外相ら380人参加

「日本非核宣言自治体協議会」（非核協）の設立30周年記念大会が2日、藤沢市民会館で開かれた。非核協は、核兵器廃絶を求める宣言や議会決議をした303の自治体で構成され、長崎市長が会長を務める。被爆地以外で開催されるのは初めてで、この日は約380人が参加した。

大会では、藤沢市立善行中の3年生が、スライドを使って平和学習活動を発表した。平和を祈る創作詩を朗読し、1万羽の折り鶴を使ってハトをかたどった造形物を披露した。近く修学旅行で訪れる広島市平和記念公園に寄贈するという。

非核協30周年記念大会で平和学習活動を発表する藤沢市立善行中の生徒＝藤沢市民会館で

被爆地以外の自治体の役割などについて考える広島、長崎、藤沢市長らによるトークセッションもあった。岸田文雄外相は「まだ世界に1万7000発の核兵器がある。廃絶に向け、世代を超えてオールジャパンで取り組まなければならず、国民一人一人の理解や地方自治体の役割が重要」と述べ、藤沢市の鈴木恒夫市長は「被爆地以外の自治体も、広島、長崎と同じ気持ちで取り組み、連携していきたい」と話した。【塚本恵】

2014年6月3日 聖教新聞

「日本非核宣言自治体協議会」設立30周年記念

神奈川 藤沢で 核兵器なき世界への連帯展

藤沢市長 「平和を求める心」広げ 身近な行動を促す展示

青年部の平和キャンペーン「SOKAグローバルアクション」の一環となる、神奈川・湘南総県青年部主催の「核兵器なき世界への連帯――勇気と希望の選択」展の開幕式が2日、藤沢市民会館で開催された。

これには長崎市の田上富久市長、藤沢市の鈴木恒夫市長、「神奈川県原爆被災者の会」の中村雄子会長ら多数の来賓が参加した。

SGI（創価学会インタナショナル）とICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）が共同制作した同展示。

今回は、1984年に設立された、日本非核宣言自治体協議会の設立30周年の記念大会の関連行事として行われた。これは同協議会会長の長崎市長の要請により実現したもの。同協議会には、全国約300の自治体が加入している。

開催地となった藤沢市は、全国に先駆けて「核兵器廃絶平和都市宣言」を制定した自治体。現在、市長が同協議会の副会長を務めている。

創価学会はこれまで、戸田第2代会長が核兵器を絶対悪と断じた「原水爆禁止宣言」（57年9月8日）を原点として、池田名誉会長のリーダーシップのもと、被爆体験集の刊行や核兵器廃絶を訴える署名運動などを行ってきた。

開幕式では、東行委員長の奥田湘南総県男子部長の後、長崎市の田上市長があいさつ。

「皆さんの中で、核兵器を実際に見たことがある人はいないと思います。私もありません。しかし、それは確実に世界のどこかにあります。普段の暮らしの中では意識しませんが、その存在を目の当たりにしたときには、もう手遅れです。だからこそ核兵器廃絶について考え続けることが大切です。この展示会は、そのための大きなきっかけになるでしょう。核兵器の問題を、これほど多角的に、また分かりやすく伝える内容は他にありません。多くの若い人にも、ぜひ見てもらいたい」と語った。

藤沢市の鈴木市長は「この展示は、平和を求める心を広げ、一人一人に核兵器廃絶への身近な行動を促します。被爆70年を迎える明年へ、私たちは力を合わせ、一層の努力を続けていきたい」と述べた。

核兵器の悲惨さを伝える展示会。「神奈川県原爆被災者の会」から被爆体験を描いたパネルも提供された（藤沢市民会館で）

来賓の長崎市の田上富久市長（右から3人目）、藤沢市の鈴木恒夫市長（同4人目）、「神奈川県原爆被災者の会」の中村雄子会長（同2人目）らがテープカット（同）

「日本非核宣言自治体協議会」設立三〇周年記念大会で「核兵器なき世界への連帯」展が開幕

日時：二〇一四年六月二日
開催地：藤沢市民会館（神奈川県藤沢市）

被爆から七〇年の節目を迎える明年に向けて、平和を願う思いと行動が新たな一歩を進めた。神奈川県藤沢市で開催された日本非核宣言自治体協議会の設立三〇周年記念大会に際し、SGI（創価学会インタナショナル）がICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）と共同制作した「核兵器なき世界への連帯」展が同大会の関連行事として開催。新たな平和への連帯が結ばれた。

「核兵器なき世界への連帯」展のパネル

被爆地以外で初開催の記念大会

核兵器の廃絶、非核三原則の遵守などを求める自治体宣言や議会決議を行う自治体で構成される「日本非核宣言自治体協議会」（以下、非核協）が六月二日、神奈川県藤沢市で設立三〇周年の記念大会を開催した。

この非核宣言自治体が世界に広がる契機となった最初の非核宣言は、一九八〇年にイギリスのマンチェスター市で行われた。米ソ冷戦の真っただ中で、核兵器の脅威の廃絶に向けマンチェスター市が非核兵器地帯を宣言し、他の自治体にも同じく宣言をするよう求めた。そこからイギリス国内に広がり、やがて世界へと広がっていく。その中で、日本でも、一九八四年に日本非核宣言自治体協議会が広島県府中町で設立される。これまでに日本の自治体の八〇％以上が非核宣言を行い、全国で約三〇〇の自治体が非核協に加盟している。

今回の設立三〇周年記念大会は、二〇〇三年に長崎市で開催された記念大会に続く二回目の開催となり、全国八二自治体の代表や市民約三八〇人が参加した。

今回の藤沢市での開催について、事務局のある長崎市によれば、記念大会の被爆地以外での開催は初めてだという。

藤沢市は、一九八二年に市民約七〇〇〇人分の署名を受け、全国に先駆けて「藤沢市核兵器廃絶平和都市宣言」を制定し、非核協設立と同時に加盟。被爆地以外の地域においても、積極的に平和への願いと行動を発信していく先駆けとなった。

非核訴える自治体の役割を確認

今回の記念大会のテーマは「連帯する自治体～被爆地でない都市の役割と可能性」。第一部ではオープニングアトラクションとして、女流書家の金澤翔子氏による力強

い席上揮毫が披露されたほか、藤沢市の善行中学校生徒による平和学習発表、トークセッションが行われた。

トークセッションでは「日本と国際社会の平和と安定に向けた取組み」と題し、非核協会長でもある長崎市の田上富久市長が進行を務め、岸田文雄外務大臣、広島市の松井一實市長（平和首長会議会長）、藤沢市の鈴木恒夫市長（非核協副会長）らと、核廃絶に向けた

女流書家・金澤翔子氏が揮毫した墨痕鮮やかな「感謝」の文字

岸田外務大臣（左から2人目）、長崎市・田上市長（左）、広島市・松井市長（右から2人目）、藤沢市・鈴木市長（右）によるトークセッション

自治体の連携や取り組みについての意見交換が行われた。

広島市の松井一實市長は、自身が会長を務める平和首長会議が推進する核兵器廃絶を着実に進めるための行動計画「二〇二〇ビジョン」を紹介しながら、次のように語った。「多くの人に核兵器をなくそうという問題意識はあるが、世界の状況を見るとなかなか進んでいない。早く進めるためにまずは各国の為政者が、核兵器は人の道に反するということを心に刻んでもらい、そこから政策を考えていくことが大切」

また、広島出身でもある岸田外相は、一二カ国の外相が参加して広島で開催された軍縮・不拡散イニシアティブ（NPDI）の意義とともに、いまだ世界に約一万七〇〇〇発もの核兵器が存在している現状を確認し、「政府が思い切って取り組む努力をするためには国民一人一人の理解が欠かせない。そのために身近な地方自治体の役割は大きい」と強調した。

記念講演を行う映画作家・大林宣彦氏

続く第二部では、長崎平和特派員のドゥ・マルシェによる記念演奏のほか、映画作家の大林宣彦氏による「ピース・フロム・藤沢」と題した記念講演や、私立湘南白百合学園コーラス部による記念合唱などが行われた。

平和の心を広げる連帯展

大会当日には、今回の記念大会の関連行事として、SGI（創価学会インタナショナル）とICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）が共同制作した「核兵器なき世界への連帯―勇気と希望の選択」展の開幕式が、同市民会館で開催された。

今回の展示は、創価学会青年部が主催する平和運動「SOKAグローバルアクション」の一環として、神奈川・湘南総県青年部が主催。同展は、

日本非核宣言自治体協議会事務局

長崎市市民局原爆被爆対策部平和推進課

〒852-8117　長崎市平野町７番８号（長崎原爆資料館内）

TEL 095-844-9923　FAX 095-846-5170

E-mail　info@nucfreejapan.com

開催地事務局

藤沢市企画政策部平和国際課

〒251-8601　藤沢市朝日町１番地の１

TEL 0466-50-3550　FAX 0466-24-5928

E-mail　heiwakokusai@city.fujisawa.lg.jp